サハ共和国（ヤクーチア）における天然資源と民族政治

イグナティエヴァ　ヴァンダ

Natural Resources and Ethno-politics in Sakha Republic (Yakutia)

IGNAT' EVA Vanda

1．地理的特徴

アジア大陸の東北部分に位置するロシア連邦サハ共和国（ヤクーチア）の面積（北極海に位置するノボシビルスク諸島も含む）は310万3200平方キロメートルであり，全ロシアの18％以上に及ぶ。その領域の40％以上は北極圏に含まれている。

共和国の南北間の距離は2000km，東西間の距離は2500kmである。最西端はエヴェンキ自治管区に接する東経105度，最東端はチュコト自治管区に接する165度，最南端はスタノボイ山脈上にある北緯55度30分，最北端はノルドヴィク岬の北緯74度，さらに海を隔てたノボシビルスク諸島のなかのゲンリエッティ島は北緯77度という具合である。

サハ共和国の境界は西をクラスノヤルスク地方，西南にイルクーツク州，南にはアムール州及びチタ州と接し，さらに東南にはハバロフスク州，東にはマガダン州とチュコト自治管区があり，北にはラプテフ海と東シベリア海によって囲まれている。ヤクーチアの領域には３つの時間帯があり，モスクワとの時差は＋６～＋８時間である。

key words：サハ共和国，天然資源，民族政治，行政構造，社会主義
キーワード：Sakha Republic, natural resources, ethno-politics, administrative structure, socialism

2．生態環境と気候

ヤクーチアの地理・地質学的特質は約40億年にわたる長い年月のなかで形成された。山地や台地がその60％以上の部分を占め，30％ほどが低地である。最高地点はチェルスキー山脈にあるポベーダ山頂の3147mである。

気候は極めて大陸的であり，長くつづく冬と短い夏によって特徴づけられる。月平均気温で最も寒いのは１月，暖かいのは７月であるが，その寒暖差は70～75度に及ぶ。最低気温の絶対値及び冬の期間が6.5ヶ月～９ヶ月ほど続くという点において，北半球においてヤクーチアに匹敵するほど寒い地域は存在しない。サハ人の住むオイミャコン村では北半球の最低気温零下71.2度が記録されており，そこは世界の「寒極」として公式に認定されている。夏は暖かく比較的乾燥的な気候であり，中央ヤクーチアにおいて最高気温は＋35～＋39度に達する。

大地のほとんどは長期にわたる時間によって形成された凍土が覆っている。凍土の厚さは300～400メートルであるが，ヴィルイ川流域では1500メートルにも達する。鉱物の凍結として，これは地球上最大のものである。

ヤクーチアはロシアにおいて最も川・湖の多い地域の一つである。共和国の全河川の長さは200万キロメートルほどになり，その潜在水力資源は，7000億キロワットになる。主な巨大河川は以下の通り。レナ川（4400km），ヴィルイ川（2650km），オレニョク川(2292km)，アルダン川(2273km)，コリマ川(2129km)，インジギルカ川(1726km)，オレクマ川（1436km），アナバール川（939km），ヤナ川（872km）。

ヤクーチアは大きく４つの自然景観地帯に分かれる。約８割はタイガの森林におおわれている。残りはツンドラ，森林ツンドラ，北極砂漠である。共和国の森林フォンド[*1]面積は２億5500万ヘクタールであり，そのうち実際に森によっておおわれているのは１億4300万ヘクタールである。樹木のうち主要なのはダウリアカラマツ（森林地域の85％）であるが，これ以外にはヨーロッパアカマツ，ハイマツ，トウヒ，カンバ（白樺），ヨーロッパヤマナラシがよく見られる。共和国森林資源の利用可能な面積は103万ヘクタールである。ヤクーチアのタイガ・森林地帯は，熱帯雨林やアマゾンなどと同様に，「地球の肺」と考えられている。

ヤクーチアの植物相には1892種の高等植物が確認され，そのうちの337種（あるいはヤクーチア全植生の17.8パーセント）がサハ共和国発行のレッドデータブックに含まれている。植物学者によると，ヤクーチアの植物相のうち68種類の草類，26種類の

低木類，７種類の樹木，３種類の地衣類，６種のキノコ類には薬用成分があり，医学分野においてこのうち85種類が利用されており，ヤクーチア先住民の民俗医療においては130種類が用いられている。

ヤクーチアの特異な動物相の進化は，更新世後期末においてこの地域に生息していたマンモス，毛サイ，バイソン，化石馬などの動物にまでさかのぼる。この時代から北方ヤクーチアはよく知られているように巨大な「マンモスの墓場」であった。

ヤクーチアのタイガ・ツンドラにおける動物の分布は次のようなものである。北極海に面した島嶼部においてはセイウチ，アザラシ，シロクマなどが生息し，大陸部においてはヘラジカ，トナカイ，ジャコウシカ，ビックホーン，アカシカ，クマ，オオカミなどがいる。一方タイガには毛皮獣もおり，それらはアカキツネ，北極キツネ，クロテン，オコジョ，イタチ，アメリカンミンクなどである。これら毛皮獣の捕獲は，ヤクーチアの先住諸民族にとってはより重大な意味があった。というのも毛皮は17世紀初頭以降，その大半がロシアへと，つまり最初は毛皮税ヤサクとして，後には国家調達というかたちで運び出されたからである。ヤクーチアの海・川・湖沼水域には約48種類の魚類がいることがわかっている。その多くはサケ科とウスリーシロサケ類であり，具体的にはネリマ（nel'ma/ *Stenodus leucichtys*），チョウザメ（oseter），オームリ（omul'/ *Coregonus autumnalis*），チール(chir/ *Coregonus nasus*)，ムクスン(muksun/ *Coregonus muksun*)，リャプーシカ(riapushka/ *Coregonous sardinella*),ウスリーシロザケ(sig/ *Coregonus lavaretus pidschian*)などである。またこの地域には250種類以上の鳥類がいることでも知られている。それらの中には国際レッドデータブックに登録されている珍しい種，たとえばベニカモメ（rozovaia chajka/ *Branta ruficollis*），白ツル（*grus leucogeranus*），黒ツル（grus monacha），シャクシギ（krogshnep-maliutka），コガモ（chrok-kloktun），コチョウゲンボウ（krechet）などが含まれている[*2]。1993年よりヤクーチアは世界自然保護基金WWFのメンバーとなった。生物学ステーション「レナーノルデンシェリド」が設置され国際学術研究が行われている。このステーション設置の目的は北方の生態システムの構造，生物資源の構造，さらに非常に興味深い北極圏に含まれるレナ川上流のデルタ地帯の生物学的モニタリングを行うことにある[1]。

３．多様な天然資源

サハ共和国には，さまざまな種類の鉱物原料がきわめて豊富に埋蔵されている。そ

れらは高度に発展した経済をつくる上で必要不可欠なものだ。共和国の領域には，100種以上の有用鉱物の埋蔵が知られており，そのうちの40種に限っても採掘されている鉱物産地は1500以上である。金は，砂鉱床・原産地鉱床産地ともに700の鉱山を数え，スズは60，ダイヤモンドおよび石炭は40づつ，石油と天然ガスは30，雲母および金雲母は25の鉱山といった具合である。

現在，比較的限定的なリストにもとづき有用鉱物に対する産業用採掘が行われているにすぎないが，それでも十分巨大な量になる。年毎の生産高でみると，26トン以上の金，精鉱アンチモンは9千トン，精鉱スズが3500トン，1100万トンの石炭，100万6千立方メートルの天然ガス，さらにさまざまな建築材料や宝石がある。

共和国鉱山産業においてはダイヤモンド採掘が主要な位置を占める。主要な鉱床構造は西ヤクーチアに分布しているが，それらは火成岩鉱床と砂鉱床の産地から成り立っている。およそ800のキンバーライト・パイプが発見されているが，そのうち150にダイヤモンドが含まれており，さらにこの中の13のキンバーライト・パイプに開発が集中している。ロシアにおいて，ヤクーチアはダイヤモンド鉱石を含んだ土地が最も多い場所であり，その埋蔵量の90％以上および採掘量の95％以上を占めている。なお，キンバーライト・パイプ以外のダイヤモンドの産地も十分に存在すると考えられている。ダイヤモンドの採掘と国内外の市場における流通は，1992年2月19日のサハ共和国大統領令によって創設された株式会社(AK)「アルロサ」を通して行われている。「アルロサ」はサハ共和国の最も重要な収入源であり，株式の60％が共和国の管轄下にある。

ヤクーチアの東部と西部にかけての「ヤナ―インジギルカ」，「レナ―ヴィルイ」，「南部ヤクーチア」とよばれる地域には金埋蔵地がひろがっている。それらの地域では，170以上の堆積性金鉱床が採鉱されており，その量は共和国の全採掘量の70～75パーセントに達する。すでに開発された鉱床はほとんど堆積性金鉱床であり，ここから得られた金はこれまで採掘された金産額全体のうちほぼ55％となる。現在これらの堆積性金鉱床から得られる金は年間採掘量の25～30％となっている。加えて，ヤクーチアでは独自の銀採掘産業の発達にみあうだけの十分な鉱脈性銀資源も存在している。

ダイヤモンドと金を中心とする原料の規模，またその産業開発の規模という点で，サハ共和国は今後将来においてロシア連邦における先導的地位を占めることになるだろう。くわえて近い将来，産業開発においてより重要となると思われるのは，石炭・ガス・石油・コンデンサートといった燃料―エネルギー原料である。北極海に面した

島嶼部を除くヤクーチア領域の20％以上において，石炭を埋蔵している（見込みも含む）と考えられている量は，現在までの探査結果から，石炭・褐炭・コークス炭等の埋蔵地数は900，深さは1800メートルの深さにまで及び，それらは全体で10兆トンほどになると算出されている。

石油および天然ガス埋蔵特別地区は，共和国の南西部全域に及んでいる。天然ガス・天然ガス―コンデンサート・石油の埋蔵が集中しているのは，「レナ―ツングースカヤ」及び「ハタンガ―ヴィルイ」石油天然ガス埋蔵地である。サハ共和国が保有するさまざまな種類の天然ガスの産業用貯蓄（1兆3千万立方メートル）及び埋蔵予測量（9兆から16兆立方メートル）は，ロシア国内の極東地方および広い意味での極東地域の市場にむけたガス輸出のための大規模な供給プロジェクトの開発に対する客観的な前提条件となるだけではない。近い将来における石油および天然ガス産業の発展，さらに独自の燃料エネルギーコンプレクスの形成のために重要なのである。こうした政策を実現するため1992年には国立石油ガス会社「サハ石油ガス」が設立され，その出資100％は共和国政府であった。1994年，この会社は株式会社（OAO）の形態へと変わったが，そこではヤクーチア政府の持株は36％をわずかに超えるほどになっている。

最新の地質探査調査の結果，ヤクーチアにはカーボンハイドレイト原料（ビチューメン・オイルシェール・水溶性天然ガス等）もあることがわかっている。これらは将来，産業開発にかかわっていくことになろう。これ以外の鉱山原料において重要なのは，スズ・タングステン・アンチモン・ニオビウム・希土類元素といった非鉄金属及び希金属であるが，いまだ十分に開発されていない。今日，共和国のベルホヤンスク―コリマ鉱床地方では精鉱アンチモン及び精鉱スズが生産され，それらはロシアの生産量のそれぞれ100％及び60％に及んでいる。しかしこの二つ以外の産地についてはまだ未開発状態である。

巨大な鉱物資源を保有するヤクーチアでは，これまでの採掘をさらに一層進めていくだけでなく，未だ十分には利用されていない新しい鉱物を生産するための組織をつくるための可能性が残されている。近い将来，舗装用砕石骨材，燐灰石原鉱，ゼオライド，岩塩などの産地に対する産業用開発がはじめられる予定である。それ以外に鉄，鉛，亜鉛，燐灰石，黒鉛，装飾用岩石などへの開発が将来の展望のなかに含まれている。ヤクーチアのさらなる地質学的調査が進めば，潜在的な鉱物原料に関する情報がより豊富になることは間違いない。というのも地質学的調査は全共和国において未だ十分とはいえないからである[2]。

今日の状況において，巨大な面積とその地中に様々な天然資源が存在することは，単にヤクーチアの経済的資産というだけではなく，ロシア連邦の構成主体のなかにおいて独自の地位を占めるという点で戦略上の意義をもっている。

4．領域行政構造

サハ共和国（ヤクーチア）は，35の領域行政単位から成り立っている。すなわち33の郡（ulus）と２つの都市管轄区（gorod s podchinennymi territoriiami）であるヤクーツク市，ニュールグンリ市から構成される[3]。郡は郷(nasleg)によって構成され，共和国全体でその数は357存在し，そのうち31は民族郷である(*3)。共和国の首都はヤクーツクである。この都市はロシア東北部において最も古い行政・政治・経済・文化・学術・教育の中心の一つである。1632年にロシアの探検家によってレナ川の中流域に設立された。

都市と呼ばれる範疇は共和国都市(respublikanskskii gorod)と郡部都市(ulusnyi gorod)の二つがある。前者はミールニィ，ニュールングリ，ニュルバ，パクロフスクである。後者にはアルダン，ヴェルホヤンスク，ビィルイスク，レンスク，オレクミンスク，スレドゥネコリムスク，トモート，ウダーチニィが含まれる。17世紀に開発され，かつて郡役場のあった町（uezdnii gorod）であるヴィルイスク（1634年設立），オレクミンスク（1635年設立），ヴェルホヤンスク（1638年設立），スレドゥネコリムスク（1644年設立）といった都市はシベリアの都市としては最も古いものである。

5．経済地区

ヤクーチアは大きく６つの経済地区――中央地区，南部地区，西部地区，東部地区，北部地区，北東部地区――に分けられる。 上記の経済地区は共和国内部の行政区分を下に作られ，それぞれ産業および農業の経済複合がみられ，また交通網も整備されている。

・中央経済地区

ここにふくまれるのは，アムガ郡，ヴィルイ郡，ゴールニィ郡，コビャイ郡，メギ

ノカンガル郡，ナム郡，タッタ郡，ウスチ・アルダン郡，ハンガル郡，チュラプチ郡とヤクーツク都市管轄区である。都市としてはヤクーツク市，ヴィリュイ市，パクロフスク市と，都市型小居住区が11，そして282の農村がある。中央経済地区の全面積は33万9800キロ平方で，そこには44万9700人が暮らしており，経済地区の中で主要な位置を占める。

中央経済地区はヤクーチアの産業の中心の一つである。ここは単に河川交通・陸上交通・航空路の交差する場というだけでなく，生産可能性をもつ企業が集中するという点においてヤクーチアの産業及び交通の中心として重要な意味をもっている。この経済地区の特徴は，エンジニアリング産業，金属加工，建材生産，軽工業，食品工業といった部門において比較的高いレベルの産業発展がみられることである。一方，石炭や褐炭，天然ガス，建設材による収益もある。

中央地区は，ヤクーチア農業にとっても重要である。この地区の作付け面積は共和国全体の７割，農業用地については６割をしめる。農業経済に含まれる主要な部門は肉乳生産の牛飼育，肉生産の馬群放牧による馬飼育，養鶏，穀類および野菜生産である。穀類は主に，小麦，大麦，エン麦が作られている。

・南部経済地区

ここには，アルダン郡，オレクマ郡，ニュルングリ都市管轄区が含まれ，地区全体の面積は41万6500キロ平方メートルで，人口は19万9200人である。この経済地区には，ニュールングリ市，アルダン市，トモット市，オレクミンスク市と16の都市型小居住区，そして94の農村がある。

南部地区もまたヤクーチアにおいて著しく発展した産業の中心の一つである。この地区の特徴は燃料エネルギー複合の生産力が集中していることである。1970年代後半から産業及び社会的インフラを備えた巨大企業が作られたが，その前提となったのは巨大な石炭原料の存在であり，それらが組織的に採掘される一方，南部地区全体にひろがる鉄道網が建設されたことである。この地方で産出される石炭の多くは，コークス炭あるいは高品質のコークス炭が混じった炭化に適したものである。それら自体は不足しがちな原料のため，極東市場における高い需要によって利用されている。加えて，この地区はヤクーチアで唯一バイカル・アムール鉄道（BAM）やアムール・ヤクーツク鉄道（AIaM）といったシベリアを横断する鉄道を通じて季節・気候をとわずロシア連邦の交通網に通じている地区である。

共和国の採鉱業は，この地区に位置するアルダン市においてはじめられた。この市

は産業開発の最も古い中心の一つであり，1920～30年代には非鉄金属（最初は金）の唯一の産地として開発が進められたのである。石炭採掘及び金採掘以外で南部地区で目立った部門は，森林・木材伐採業である。

さらに，南部地区では畜産業（肉・乳利用の牛飼育，養豚，養鶏）および食用作物の発展に特徴がある。これらは地区内部の市場において需要が高く，農業経済の基盤となっている。伝統的経済部門としては，先住民による重要な生業であるトナカイ飼育・狩猟業がある。

・西部経済地区

ここにはアナバル郡，ベルフヘネ・ヴィルイ郡，レンスク郡，ミールニンスク郡，ニュルビン郡，オレニョク郡，スンタール郡がふくまれる。全体の面積は76万8700万キロ平方メートルで，人口は22万1000人であり，人口規模からいうと中央経済地区に次ぐ。ここには，ミールニィ市，レンスク市，ウダチィニィ市，ニュルバ市があり，６つの都市型小居住区と135の農村がある。

西部地区は，ヤクーチアにおいてダイナミックな産業発展をとげている地区である。その潜在的な経済力は，なによりも西部ヤクーチアのダイヤモンド採掘・加工複合巨大企業の存在に負っている。加えて，ここにはヴィルイ川の水力エネルギーを利用した治水施設があり，生産されるエネルギーは共和国西部に供給されている。また森林伐採産業も一定の位置を占め，高価な建築材や家具生産のための高品質な材料を生産している。

西部地区における農業生産は，共和国の中央地区に次ぐ規模である。作付け面積は全ヤクーチアの20％，農業用地は19％を占めている。農業経済の構造は伝統的生業である肉乳利用の牛飼育，肉利用の馬群生産，毛皮獣飼育，穀類・野菜生産が中心で，西部経済地区の北部においてはトナカイ飼育と狩猟業が行われている。

・東部経済地区

ここにはオイミャコン郡，トンポン郡，ウスチ・マイ郡が含まれ，面積は32万3300キロ平方メートル，人口は6万600人である。この地区の中には17の都市型小居住区と，61の農村がある。

非鉄金属，多金属鉱，石炭及び褐炭，さらに建設材料の産地がこの経済地区内では多数見られ，それがここの経済的特徴となっている。地区の産業発展の物質的基盤を形成する工業企業群は，上流インジギルカ金採取コンプレクス，ハンディグ採炭コン

プレクスおよびドゥジュグドゥジュル金採取コンプレクスを結ぶ三角形のなかに位置している。これらの地帯は同時に建築物資・食品・森林及び伐採生産企業も集中している。

東部経済地区農業で目立つのは，トナカイ飼育と毛皮獣狩猟であり，さらに肉乳利用の牛飼育，肉利用の馬群生産，穀類及び野菜生産である。

・北部経済地区

ここにはブルン郡，ベルホヤンスク郡，ジガンスク郡，ウスチ・ヤンスク郡，エヴェノ・ヴィタンタイ郡が含まれ，その面積は67万3800キロ平方メートル，人口は５万6900人。この地区には都市であるヴェルホヤンスク市，12の都市型小居住区，そして74の農村がある。

この地区は共和国の産業中心からはきわめて遠く，農業生産もとくに比重が高いわけではないが，それでもヤクーチア経済構造において独自のニッチを持っている。というのは北部地区はラプテフ海に面し，北氷洋ルートと直接つながっているからである。このルートは1991年７月１日以降外国航路としても開かれた。レナ川とともにヤナ川，オレクマ川は，共和国のあらゆる経済地区を結びつける交通・コミュニケーションシステムをなしている。というのもヤクーチアの河川は南北間に流れており，さまざまな大小含めた河川が北と南との間の天然の網となるからである。ここには1930年代初頭に建設されたヤクーチアで最初の海洋港チクシが位置している。この港を通して，通過用貨物（とりわけ液体燃料）の大半が北極圏内に位置する共和国の郡に入ってくるのだ。北方圏フォーラム[*4]に加入する諸国による北氷洋ルートの新しい利用コンセプトが模索されており，そのことはこの経済地区のみならず，サハ共和国全体の経済発展へ好ましい影響を及ぼすことは間違いない。

現在，北部地域の産業の中心は，金・スズ・水銀・タングステンの採鉱及び河川・海洋における生物資源の採取である。また木材の河川及び沿岸の水上運搬もこの地区の経済にとって重要である。将来の展望としては，ラプテフ海大陸棚における石油・ガスの開発及び環北極航路の発展も見こまれている。農業としては極北先住民族の伝統的生業であるトナカイ飼育・漁業そして毛皮獣狩猟がその中心である。

・北東部経済地区

ここにはアビイスク郡，アラライホフ郡，ベルフネコリムスク郡，モム郡，ニジネコリムスク郡，スレドゥネコリムスク郡が含まれ，全体の面積は56万1400キロ平方

メートル，人口は４万2100人である。人口の規模からすると最も小さな経済地区である。このなかにはスレドゥネコリムスク市のほか，４つの都市型小居住区，そして76の農村がある。

この地区の経済は農業とりわけ畜産が中心であり，それに毛皮獣狩猟および漁業という構成である。畜産の中心はトナカイ飼育，毛皮獣飼育であり，そのほか肉乳利用の牛飼育及び肉利用の馬群生産がある。産業はそれほど発展していないが，石炭開発や海洋漁業による保存・加工関連の生産複合も見られる。

北東経済地区にはさまざまな部門の経済複合が形成しうる潜在性がのこされている。この地区は東シベリア海沿岸に面しており，北氷洋ルートの一部であるからだ。このルートには北レドヴィド海に注ぐインディギルカ川及びコリマ川が接続しており，これらは共和国の経済地区だけでなく，マガダン州ともつながっている。

６．諸民族の歴史と文化

ロシアの植民地化が開始されるはるか以前から，ロシアのレナ地方（ユーラシア大陸東北部に対する旧称）にはさまざまな原住諸種族および諸民族が暮らしてきた。彼らは何千年にもわたってこの地域に適した生業適応を行い，ほぼすべての領域に進出してきた。ある専門家によれば，さまざまなかたちで分布している先住民族の経済・文化類型(*5)は，ホモサピエンスとしての人類の極北環境への適応メカニズムとしてだけではなく，「自然地理および社会経済的過程における社会と自然の相互作用と動態的な均衡の結晶」として理解すべきものである[4]。

・ユカギール

種族としてのユカギール（自称はヴァドゥル，オドゥル）は，レナ川下流からアナディール川にかけての広大な領域に暮らしてきた。レナ川流域及びヤナ川流域にはコロモイ(koromoi)，オモロン(omolontsy)，ヤンダギル(iandagirtsy)と呼ばれるグループが住み，インジギルカ川流域にはオリュベンジ(oliubenzi)，ショロンボイ(shorombi)，ヤンギン(iandintsy/iangintsy)が，そしてアラゼイヤ川及びコリマ川流域にはアライ（alai/alazei)，コギメ(kogime)，ラヴレン(lavrentsy)，オモキ(omoki)が，アナディール川流域にはアナウリ(anauly)，ホドゥイン(khodyntsy)，チュヴァン(chuvantsy)といったグループがそれぞれ住んできた(*6)。

ユカギールの民族起源は，紀元前２～１千年紀の考古学上のウスチ・ミール文化と関係する独自の種族が関わったといわれている。

ユカギールの主要な生業は，半遊動ないし遊動的な狩猟である。ツンドラにすむグループは主として野生トナカイが，タイガにすむグループは野生トナカイの他にヘラジカ，シベリアビックホーンが主な狩猟対象だった。季節に応じてさまざまな生業に従事していた。夏には鳥の卵の捕獲，秋委は漁労，冬には毛皮獣狩猟という具合である。彼らはトナカイを飼育していたが，それは主として交通用であり副次的な位置にあった。それ以外に橇牽引及び狩猟用にもちいる犬も持っていた。17世紀の前半のユカギール種族の人口は，いくつかの説があるが，おおよそ５～９千人だったといわれている。

・チュクチ

チュクチは自称をリグオラベトルアン（lyg"oravetl"an）といい，チュコト自治管区と北レドヴィト海沿岸に住んでいる。

チュクチもその中に含まれる北東パレオアジア種族形成に関与した古い基層文化は，新石器時代後期のヤクーチアに現れるウミィヤフタフ(Ymyiakhtakhskaia)文化と関係しており，その担い手が後になってユカギールの祖先をなす集団を同化したといわれている。

チュクチの生業の特徴は大きく二つある。一つは「チャウチュ（chauchu)」と自称する人々によるツンドラのトナカイ遊牧であり，もう一つは「アンカリン(ankalyn)」による定住的な狩猟と海獣狩猟である。前者はトナカイ・チュクチとも呼ばれ，家畜トナカイの群れとともに一年を通して，アラゼイヤ川，コリマ川，シェラグスキ岬，ベーリング海峡に至る領域を遊動する生活を送っていた。その遊動パターンはツンドラ地帯から，東シベリア海・チュコト海・ベーリング海の沿岸に移動し，戻ってくるというものであった。これに対し沿岸に定住し，海獣狩猟に従事するいわゆる海岸チュクチが暮らしていた場所は，デジュネフ岬からクレスト湾さらにアナディール川とカンチャラン川下流域にかけてであった。彼らは春及び冬にはアザラシを，夏から秋にかけてはセイウチや鯨を捕獲した。17世紀末のチュクチの人口は８～９千人だったと考えられている。

・エヴェンキ

すでに５～７世紀に中国の記録に「khi奇」として知られ，かつてツングースとよば

れたこの民族が暮らしてた地域は巨大な領域に及ぶ。西はオビ川，エニセイ川から東はオホーツク海にいたり，南は中国東北部から北はエニセイ川とレナ川に挟まれたツンドラ地帯までだからである。エヴェンキには数多くの自称をもった地域集団があり，イレ(ile)と名乗る集団はレナ川上流，ポドカメンノイ川，ニージノツングース川，ヴィテマ川下流に分布していた。オロチェン(orochen)という集団はザバイカルからゼヤ川及びウチュル川まで，さらにマタ(mata)という集団はオレクマ川流域に，オホーツク海沿岸の集団は「キレン（kilen)」だった。アムール川中下流域には，ブレイ川流域の「ビラルチェン(birarchen)」，ゼイ川中域では「マニャギル(maniagir)」，クマレ川では「クマルチェン(kumarchen)」という集団がおり，またザバイカル地方には「ハムニガン（khamnygan)」「ソロン(solon)」「オングコル(ongkor)」等々という状況であった。

エヴェンキは東シベリアに原住したさまざま種族つまり，ユカギールや10世紀頃プリバイカル及びザバイカル地方のツングース・満州系の種族が混じり合って民族が形成された。

エヴェンキは地域によってそれぞれさまざまであるが，主として三つの生業文化に分けることが可能で，徒歩エヴェンキ・トナカイエヴェンキ・馬エヴェンキと呼ばれる。徒歩エヴェンキの多くはタイガの狩猟民であり，トナカイ・ヘラジカ・ノロ・ジャコウジカ・シベリアビックホーン・オオヤマネコ・クズリ・オオカミ・クマなどの獲物を求めて常に移動する生活であった。生活のために重要な狩猟を行うため，その移動手段として騎乗及び駄載トナカイも用いていた。後には毛皮獣であるクロテン・キツネ・リス・オコジョ・北極キツネもその対象となった。トナカイエヴェンキは，家畜トナカイの新しい放牧地を求めて移動を繰り返す遊動生活を送っていた。家畜トナカイの群れは通常25～30頭ほどで，彼らは夏には分水嶺に赴き，冬には川沿いに移るという移動パターンだった。馬エヴェンキは，ザバイカル地方南部そして中国（大興安嶺の支脈）やモンゴル（イロ川上流及びブイルーヌル湖付近）と接する地域にくらしていた。彼らは定住的生活を行い，さまざまな家畜を飼っていた。上記の分類とは別に，プリバイカル地域及びザバイカル地域南部，ヴィルイ川上流，さらにオホーツク海沿岸には漁労を中心とする集団もあった。

・エヴェン

かつてラムート諸種族と呼ばれた人々（自称はウヴン［yvyn］）は，エヴェンキの分布域から北東に広がる領域，つまりベルホヤンスク山脈の支脈，コリマ川・インジギルカ川・オモロン川の各流域，オホーツク海沿岸で暮らしてきた。エヴェンはその内

部に複数の集団があり，それぞれ名前をもっており，コリマ川上流の集団はメネ（mene）と称し，チュクチの住む領域の西側の集団はウヴン（yvyn），さらにオホーツク海沿岸の集団はオロチ（oroch）あるいはオロチェル（orochel）という具合だった。

エヴェンの民族起源は，ツングース・満州系の諸種族と関係しており，紀元１世紀頃アンガラ川及びアムール川の中流から下流域から現れた人々が，ヤクーチア北東部地域に住んでいたユカギール系の文化を持っていた人々と混合して成立したといわれる。

エヴェンの生業複合の特徴は，漁労や毛皮獣狩猟をともなう遊動的トナカイ飼育あるいはタイガでの半遊動的狩猟である。彼らの中には定住的あるいは半定住的生活を送っていた集団もおり，そこでは海獣狩猟や河口での漁労が中心だった。専門家によれば，18世紀初頭エヴェンとエヴェンキをあわせた人口は８～９万人だったといわれている。

・サハ

レナ地方の主要な住民はサハ（自称はサハ，ロシア語による名称はヤクート）であった。彼らは中世初期の時代に南シベリアのモンゴル・テュルク系種族が中心とし，主としてツングース系諸種族を同化して形成された民族である。なおサハの民族構成要素としてサモディー系の要素をも含まれているという仮説もある。

伝統的にサハの多くはアムガ川とレナ川の間の領域，及びヴィルイ川流域に暮らしてきた。またそれほど多くはないがオレクマ川河口付近やヤナ川上流域にも住んでいた。サハは35～40の外婚制集団（種族）に分けられ，それぞれ地域ごとに独自の自称を持っている。レナ川左岸域にはハンアラス族，ナム族，レナ川とアムガ川の間には，メギン族，ボロゴン族，ベトゥン族，バツルス族といった具合である。

サハの伝統的生業は，馬群による馬飼育と牛飼育それに集団漁労，マツやカラマツの伐採，さまざまな根や植物（ベリー類も含む）の採集である。北方に住むサハの中にはトナカイ飼育を行っていた集団もいた。さらにタイガに住む動物――クマ・ヘラジカ・トナカイ・ウサギ・鳥類などを対象にする狩猟も副業的な意味として広く行われていた。さらに，リス・キツネ・クロテン・北極キツネなどの毛皮獣猟もあった。特徴的なのは手工業が発達していたことである。鍛造・木材細工・貴金属細工・陶器制作などがこれにあたる。

・ドルガン

ドルガンは民族自称を，ティアキヒ（tya　kihi）あるいはサカ（saka）といい，19世紀後半に主として４つのツングース系種族であるドルガン（dolgan），ドンゴト（dongot），エジャン（edian），カラント（karanto）から形成された民族である。さらに北方サハ・エネツ・ネネツ・「ツンドラ後方の農民」と呼ばれたタイムィール地方の先住ロシア人[*7]といったさまざま民族の一部もドルガンの形成に加わった。彼らの多くはタイムィール半島に暮らし，さらにアナバール川沿岸にも数は少ないが住んでいた。

彼らの生業複合は，トナカイ飼育，狩猟，漁労から成り立っている。そのなかで最も重要なのはツンドラ型トナカイ飼育である。ドルガンのトナカイ飼育では，他の先住民と比べてそれほど長い距離にわたる季節移動は行わなかった。下記はツンドラに赴き，冬には森林ツンドラに移動したからである。狩猟の主な対象は野生のトナカイであり，これ以外に春には水鳥やライチョウが，秋にはカモ類が狩られた。毛皮獣狩猟についていえば，キツネ・オコジョ・赤キツネが捕獲された。ハタンガ川流域やツンドラに数多く点在する湖では漁労も行われた。

17世紀初頭には，レナ地方に住んでいたさまざまな種族や民族は上記のようなかたちでそのほぼ全域にわたって分布していた。古い時代から，このレナ地方においてさまざまな民族の移入・混合があった。その結果，現在にいたるような民族起源と民族文化の特徴をもつエスニック集団が形成されたのであった[5]。

・ロシアの植民地化と社会主義，そして現在

17世紀の最初の四半世紀に，レナ地方は「経済的領域」として征服されロシアの一部となった[6]。この時代から現在のヤクーチアの領域は明確になり，ロシア人を主とする東スラブ系住民の人口が増え始めたのである。彼は当初，行政府・軍隊・宗教組織で働く人々あるいは商人であったが，後には農民も入植するようになった。ロシア人は定住のための入植拠点つまり要塞（ostrog）や柵（ostrozhek）そしてヤサク（毛皮税）取り立てのための冬営地（zimov'e）といったものの建設を急速に進めた。それらは先住民にとってみると，ヤサクを規則的かつ組織的に取り立てるための場所でしかなかった。

公式文書資料によれば，17世紀の後半にロシア人初期植民者が建設した入植拠点は20を越えていた。レナ要塞，オレクマ柵，チェチュイ柵，さらに21にも及ぶヤサク冬

営地，具体的にはチャランスコエ，３つのヴィリュイスコエ，ジガンスコエ，オレンスコエ，ブタリスコエ，トントルスコエ，マイスコエ，２つのヤンスコエ，３つのインジギルスコエ，アラゼイスコエ，３つのコリムスコエ，アナディールスコエ，チェンドンスコエ，そしてオホーツコエであった[7]。入植拠点は時代によって場所を変える場合もあり，その総数はしばしば変わったが，そうした状況は入植が至るところで頻繁に行われていたことを示している。

17世紀から19世紀にかけてのヤクーチア領域における経済植民地化の結果，東スラブ系住民がまとまって暮らす状況を生み出した。後に，彼らは比較的均質的な民俗的特徴をもつ先住ロシア人となった。中央ロシアとヤクーチアは地理的に離れており，また彼らは当初少数であったこと，さらに厳しい自然―気候条件下で新たな生活を送るための適応が必要だったこと，それらの理由によって，これらロシア人の伝統的民俗文化は変容し，彼らが移り住んだ地方的・北方的変種が形成されたのである。入植者達の民俗文化適応の過程は一方的なものではなかった。文化複合の変容は先住ロシア人だけでなく，同時にヤクーチアの先住民にもおよんだ。後者もまた顕著な文化伝播の影響を受けたのだった[8]。

ヤクーチアがロシアに組み込まれてから常に入植者及び先住民(*8)の人口は変動してきた。植民地化がすすむなかで次第に進んだことは，もともと存在した歴史・文化的領域の範囲が狭まったことである。疫病・家畜伝染病・大規模な飢餓が頻繁に起きたため，住民の人口は大規模に減少した。19世紀の間にかつて数千の人口がいた諸種族は次のような状況になった。19世紀末においてユカギールは948人，チュクチは1558人，エヴェンとエヴェンキは11647人であり，ヤクーチアにおける彼らの比率は全部あわせて5.3%だったのである。この地域で人口の点で優勢であったサハ（19世紀末には22万1500人おり，ヤクーチアの人口の82.1％）の影響のもとで（他の民族を取り込む）同化が進行したことも，ヤクーチア人口の展開に大きな影響を及ぼした[9]。

1897年，ロシアにおける最初の国勢調査が行われたが，ここからわかるのは，当時行政区分として存在したヤクート州における民族構成の多様化が進行し，ロシア帝国の他の県から移民が流入していたことである。国勢調査の分析からは，ヤクーチアでは新たに現れた42の言語及び方言が分類され，それに対応して42の種族・民族が存在していたのである。国勢調査後ロシア帝国の民族構成は，言語によって確定されるようになった。帝国において最も人口の多いロシア人（この場合，３つの東スラブ系民族つまり，大ロシア人・小ロシア人・白ロシア人が統合された総称）は，ヤクート州においては３万600人で，彼らの割合は11.3%だった。他の諸民族の人口および割合

はいずれもきわめて小さいものであった。

ヤクーチアの新たな住民達の多くが住み着いたのは，当時金鉱山があったオレクマ管区で，ここには最も多い81.6％が集中していた。二番目に多かったのは14.8パーセントが暮らしていたヤクーツク管区で，ここにイルクーツク―ヤクーツク間に多数あった郵便・交通ための宿駅――これらを経営していた初期のレナ地方への入植者の子孫達，農業を行うために入植した農民が暮らしていた[10]。

1920～30年代には大規模な移民が押し寄せていた。これは，当時のヤクート自治共和国での産業開発が原因である。こうした傾向は1960～80年代にかけて雪崩のように強まり，この地域の民族構成の動態に著しい影響をもたらした。1989年に行われたソ連最後の国勢調査によると，自治共和国には116の民族が登録された。とはいえ，この数字にはソ連の公式民族リストに含まれない12の民族が除外されている[*9]。

過去40年の間に，ヤクーチアの有力な民族はロシア人となった。文字通り人口の点で50.3％を占めていること，またソ連全体の民族階層のなかでの位置付けという二つの意味において「有力」なのである。ヤクーチア先住民及びロシア人を除いた他の民族は合計で14.1％であり，このうち8.0％はウクライナ人とベラルーシ人であった。つまりヤクーチア先住民を除いて，ヤクーチアに暮らす民族の大半（90.5％）は東スラブ系の住民となったのである。次いで多かったのがタタール人，バシキール人，チュワシ人，モルドワ人，マリ人といったボルガ流域の諸民族だった。三番目はヤクーチア先住民には含まれていないシベリアの諸民族で，その人口比は3.1%だった（なおこのカテゴリーにはブリヤート人は含まれていない）。その内部で複雑な構成をもつカフカスやダゲスタンの諸民族は1.2％，カザフスタンなど中央アジアの諸民族が0.5％，沿バルト地方の諸民族は0.2％，外国人は1.4％――こうした状況が元来この地域に住んでこなかった人々の構成である[11]。

1959年から1989年にかけてのソ連国勢調査が示しているのは，20世紀の中葉はヤクーチア先住民にしてみると危機的な人口発展の始まりだったということである。つまり移民が入ってくることは，自治共和国におけるヤクーチア先住民の人口比を著しく下げたからである。1989年の国勢調査では，ヤクーチア先住民の人口比は35.6％でしかなかった。その内訳は，サハ人が33.4%，エヴェンキ人が1.3%，エヴェン人が0.8%，チュクチが0.1%となる。ヤクーチア先住民の人口減少が進んでいることに対し，「シベリア少数民族」の代表者達は，100年前と同様に深刻な懸念を表明している[12]。

7．住民の人口構成

2000年1月1日現在で，サハ共和国（ヤクーチア）の人口は988,600人である。膨大な面積であるにもかかわらず，ヤクーチア領域はここ100年間において人口密度は低い。20世紀の初頭および末いずれにおいても，平均人口密度はロシアのヨーロッパ部と比べて10分の1程度である。ヤクーチアを構成する行政区ごとに人口密度の分布をみてみると，居住のパターンは一様ではないことがわかる。居住に影響するのは，自然・気候的および経済的な要素である。農業生産において比較的好条件のメギノ・カンガル郡，ナム郡，チュラプチ郡，ハンガル郡，そのほか工業生産と交通網の整備が進んだヤクーツクやニュールングリの都市管轄区においては人口密度は高く，1平方キロメートルあたり1.2～2.8人である。人口分布は不均等であり，最も人口密度が低いのは，極地気候帯にあり生活および生産活動に好条件とはいえない地域つまり，オレニョク郡，アライホフ郡，ジガンスク郡，ブルン郡，エヴェノ・ヴィタンタイ郡，アナバル郡，アヴィ郡，スレドゥネコリムスク郡である。ここでは1平方キロメートルあたり0.01～0.08人である。上記以外の共和国郡における人口密度は1平方キロメートルあたり0.1～0.9人という具合である。

ソ連崩壊とその後の政治社会的不安定によってもたらされたのは，労働移民が大量に発生し，彼らがサハ共和国へとやってきたことである。また広範囲にわたる大規模な経済改革等が行われる際に十分な熟慮がなさなれなかったため，極北地区にすむ住民に対してはその恩恵がわずかな形でしか及ばなかった。それゆえ最近では移民流入型から移民流出型へとヤクーチアはかわってきた。

いうまでもなく，移民の存在はサハ共和国の民族構成動態に大きな影響を与えている（表参照）。第一にここ40年間をみてみると，サハ人の比率が大きく伸びている。サハ人は他の民族と比べて，常に相対的に高い出生率をともなう自然増加という特徴がある。それに対応するようにロシア人の比率は減っている。減少した部分の大半はヤクーチアから出て行った人々である。その結果，サハ人とロシア人の間の人口比率差は1989年において16.9パーセントだったのが，1996年には8.1パーセントとほぼ二分の一になった。

第二点としていえるのは，これまでにはそれほどみられなかったことであるが，北方・シベリア・極東地方の少数民族さらにカフカス・ダゲスタン，中央アジアおよびカザフスタンの諸民族の人口が恒常的に増加していることである。彼らの中ではア

表　1989～1996年におけるサハ共和国（ヤクーチア）の民族人口動態

民　族	1989年		1996年	
	人口（千人）	比　率	人口（千人）	比　率
サハ人	365.2	33.4	408.6	39.7
エヴェンキ人	14.4	1.3	16	1.5
エヴェン人	8.7	0.8	10.5	1
チュクチ人	0.5	－	0.5	－
ユカギール人	0.7	0.1	0.8	－
ドルガン人	0.4	－	0.5	－
ロシア人	550.3	50.3	491.7	47.8
ウクライナ人	77.1	7.1	60.7	5.9
ベラルーシ人	9.9	0.9	7.8	0.8
タタール人	17.4	1.6	14.9	1.5
ブリヤード人	8.5	0.8	8.4	0.8
その他	41	3.7	8	1
共和国全体	1094.1	100	1028.4	100

ト人のほか，いわゆる「民族間の緊迫」を理由とする移住者であるアルメニア人，アゼルバイジャン人，イングーシ人，キルギス人，タジク人などの増加が多い。

第三にロシア連邦外に民族的故地をもつ民族の人口が増加していることである。サハ共和国（ヤクーチア）内務省査証登録課（MVD OVIR）によると，外国からの移民でヤクーチアの民族構成に大きな比率を占めるのが中国と北朝鮮からの人々である。こうした外国移民の流入やロシア人やヤクーチア先住少数民族の流出といった状況を背景として，中国及び北朝鮮からの移民数の増加は単に新たな社会的実態を形成するだけでなく，むしろ近い将来において新しい民族政治の実態を生み出すことになろう。今後その状況がどのように展開するさまざまなバリエーションを分析しておく必要がある。

8．国家行政制度

サハ共和国（ヤクーチア）は多民族からなる人民の権利と自決権を基盤とする主権をもつ民主的法治国家である。1992年３月12日に締結された連邦条約にもとづいて，ロシア連邦の構成に加入した[*10]。

現行のサハ共和国憲法は，1992年４月４日に「<サハ共和国（ヤクーチア）憲法（基本法）の効力開始の手続きについて>の法律」が採択され，同年４月27日に施行された。この日は「共和国の日」と宣言された。

憲法制定と平行して，サハ共和国（ヤクーチア）は国章，国旗やその他の国家の象徴を有している。それら共和国の公式な象徴は，国章や国旗の内容や意味を通して簡潔に表現されているように，多民族からなる共和国人民の結合を示す政治的シンボルが具体的に示されている。

サハ共和国の国章は，その国家の民族的性質を強調している[*11]。銀色の太陽の円が中央部におかれ，その中には旗をもった古代の騎士が描かれている。これはレナ川沿いにある岸壁画遺跡から取られたものだ。また国章の上部には，七つの暗青色の水晶の伝統的な民族文様が，ダイヤモンドの形で描かれている。下の部分には，共和国の正式な名称が二つの国家語つまりロシア語での「Respublika Sakha (Yakutia)」とサハ語での「Sakha Respublikata」と記されている。

サハ共和国（ヤクーチア）の国旗は布地で，５つの要素から成り立っている。４つの色の付いた帯と真ん中に位置する白い円である。これらの色の組み合わせは，ロシア連邦国旗の配色に対応しており，ヤクーチアとロシアの結びつきを象徴している。国旗の色はサハ共和国の気候・自然と多民族的な特徴を反映している。白の太陽の背景の青は，世代の継承と，「白い太陽の子」であると自ら考えていたサハ民族の伝統的世界観への尊敬を意味している。白は北方の厳しい美しさであり，同時に厳しい条件の中で生き抜いてきた諸民族の考え方の純粋さを示している。緑色は，タイガの広大さ，ヤクーチアにおける短いが肥沃な北方の夏そして友情と友愛を意味すると同時に共和国にすむ諸民族の復興と故郷のための創造を示している。最後に赤色は，故郷の地への忠誠，過ぎ去った世代への記憶への敬意である。

サハ共和国の国家権力は，大統領，議会(IL　TUMEN)，憲法と最高裁判所にある。

サハ共和国（ヤクーチア）大統領は共和国権力を執行する責任者として最高の地位であり，共和国市民による直接の平等普通選挙によって５年ごとに選出される。サハ共和国議会(IL　TUMEN)は，共和国における最高の立法・監督機関である。議会は上院である共和国院(Palata Respubliki)と下院の代表院(Palata Predstvitelej)（それぞれ定員35の議員）の二つの院からなる。共和国院はそれぞれの領域行政単位（郡）内に設置された一人区毎から選出された議員が構成する。代表院は人口比に応じて設けられた選挙区から一人づつ選ばれる[*12]。

サハ共和国（ヤクーチア）憲法裁判所は，立憲体制を擁護する最高の司法権力機関

である。七つの裁判所から構成され，そこから憲法裁判所所長が選出される。サハ共和国（ヤクーチア）の最高裁判所は，民事・刑事・行政事の執行に関わる最高の司法権力機関である。

「<サハ共和国（ヤクーチア）の言語に関する>法律」（1992年10月17日採択）により，サハ語とロシア語が国家語に定められる。エヴェンキ語，エヴェン語，ユカギール語，ドルガン語，チュクチ語は，それらの民族の集団的居住地においては，地方の公式言語となる地位をもっている。

翻訳：高倉浩樹

付記：原文はVanda Ignat' eva によるRespublika Sakha (Yakutiia): obshchie svedeniiaである。V.イグナティエヴァ氏はサハ人社会学者として，ヤクーチア地域の民族政治状況を中心に多くの研究成果を発表してきた。主な著作として*Natsional'nyi sostav naseleniia Yakutii* (*Etno-statisticheskoe issledovanie*), Yakutsk: Yakutskii Nauchinyi Tsentr SO RAN, 1994. *Respublika Sakha* (*Yakutiia*): *Restrospektiva etnopoliticheskoi istorii*, Novosibirsk: Nauka, 1999がある。訳出した本論文は，2002年２月14日に東北大学東北アジア研究センターで行われたイグナティエヴァ氏による口頭発表の原稿である。その後，彼女から同じタイトルの改訂版が訳者へと送付され，その改訂版を下に翻訳した。ただし初版にかかれていたが改訂版から削除されていた内容で，訳者にとって重要だと思われる部分については，著者の承諾をえて翻訳した。それは主として本訳文における7および8章にあたる。また章・節の見出し語については基本的に原文を踏襲したが，一部わかりやすく修正した箇所がある。これについても著者の承諾をとった。

謝辞：本論文の内容は自然科学から人文社会科学にわたっており，それぞれの専門用語の翻訳については北風嵐氏（金属鉱床学，東北大学），伊賀上菜穂子氏（ロシア民族学，大阪大学）から助言をうけた。ここに記して感謝したい。

原　註

［1］ヤクーチアの地理・地質学的状況および自然条件の資料については下記を参照。Atlas sel' skogo khoziaistva Yakutii, Moskva, 1989, p.115; Atlas Yakutskoi ASSR, Moskva, 1981, p. 40; Atlas Yakutiia, sotsialisticheskaia, Moskva, 1982, p. 39; Yakutskaia ASSR. Kratkij geograficheskii slovar' -spravochnik, Yakutsk, 1980, p.184.

［2］ヤクーチアの天然資源のデータについては下記を参照。Prirodnye resursakh i ikh ratsional'

noe ispolizovanie // 1-ia Mezhdunarodnaia konferentsiia 〈Znanie na sluzhbu nuzhdam Severa〉: Tezisy dokladov, Yakutsk, 1996, p.177-233; Yakutskaia ASSR. Kratkij geograficheskii slovar' - spravochnik, Yakutsk, 1980, p.184.

[3] サハ共和国（ヤクーチア）の人口及び居住地は1994年1月1日現在のデータである。

[4] Masanov, N.A. Printsip dispersnogo sostoianiia kak vseobshchii printsip zhiznedeiatel'nostikochevogo obshchestva// Kul'turnye i khoziaistvennye traditsii narodov Zapadnoi Sibiri. Novosibirsk, 1989, p.83-84.

[5] ヤクーチアの民族史については下記を参照。 Dolgikh, B.O. Rodvoi i premennoi sostav narodov Sibiri v XVII veke, Moskva, 1960; Vasilevich, G. M. Eveki. Istoriko-etnograficheskie ocherki. XVII - nachalo XX vv., Leningrad, 1960; Karlov, V.V. Evenkiv XVII - nachale XX vv. (khoziajstvo i sotsial'naia organizatsiia), Moskva, 1982; Gogolev, Z. V., Gurvich, I.S., Zolotareva, I.M. and Zhornitskaia, M.Ia. Iukagiry. Istoriko-etnograficheskii ocherk, Novosibirsk, 1975; Istoriia i kul' tura chukchei: istoriko-etnograficheskie ocherki, Leningrad, 1987; Goglev, A.I. Istoricheskaia etnografiia yakutov: voprosy proiskhozhdeniia, Yakutsk, 1986; Khobystii, L.P. Drevnie kul'tury Taimyra i krupnye etnicheskie obshchnosti Sibiri // Proiskhozhdenie aborigenov Sibiri i ikh iazykov, Tomsk, 1973; Narody Rossii. Entsiklopediia, Moskva, 1994, p.479.

[6] Basharin, G. P. Nekotorye voprosy istoriografii vkhozhdeniia Sibiri v sostav Rossii, Yakutsk, 1971, p.135.

[7] Parnikova, A.S. Rasselenie yakutov v XVII - nachale XX vv., Yakutsk, 1971, p.13.

[8] Safronov, F.G. Russkie na severo-vostoke Azii v XX - seredine XIX vv., Moskva, 1978; Safronov, F.G. Russkie krest'iane v Yakutii (XVII - nachalo XX vv.), Yakutsk, 1961; Safronov, F.G. Russkoe naselenie Yakutii v XVII v., Russkoe naselenie Yakutii v XVIII i pervoi polovine XIX vv.// Istoriia Yakutskoi ASSR, v.2, Moskva, 1957.

[9] Patkanov, S. K. O priroste inorodcheskogo naseleniia Sibiri: statisticheskie materialy dlia osveshcheniia voprosa o vymiranii pervobytnykh plemen, Sankt-Peterburg, 1911; Iakobii, A. N. Ugasanie inorodcheskogo plemeni Sibiri, Sankt-Peterburg, 1913.

[10] Ignat'eva, V. B. Natsional'nyi sostav naseleniia Yakutii. Etno-statisticheskoe issledovanie. Yakutsk, 1994, p.144.

[11] Ibid., p.49-50.

[12] Donskoi, F. S. Puti vozrozhdeniia i rasvitiia narodov arkticheskoi zony Rossii // Iazyki, Kul'tura i budushchee narodov Arktiki, Yakutsk, 1994, pp.106-109; Narody Severa Rossii kak chast' tsirkumpoliarnoi tsivilizatsii, Yakutsk, 1994, p.39.

訳　　註

（＊1）森林フォンド（lesnoj fond）とは非森林以外の沼沢地なども含むロシア独自の概念で英訳するとtotal forest area/ forest land baseと訳される（『露英和森林辞典』（日本林業調査会,1999）。

（＊2）魚類及び鳥の名前については，日本語訳が不明なものの場合，ロシア語をそのままカタカタにして表記している。括弧のなかは，ロシア語ついで学名となっている。学名については原文にあった場合，そのまま表記し，それ以外についてはJ.P.Ziker (Peoples of the Tundra: Northern Siberians in the Post-Communist Transition, Prospect Heights, Illinois: Waveland Press, 2000, p.28)の著作を参照した。

（＊3）ソ連時代，raionと呼ばれていた行政単位は1993年10月12月サハ共和国（ヤクーチア）最高会議決定によりulus（郡）と呼ばれるようになった。さらに1995年6月6日に採択された「サハ共和国（ヤクーチア）領域行政制度についての法律」によって，郡の下位行政単位としてnasleg（郷）が用いられ始めた（Respublika Sakha (Yakutiia) Administrativno-territorial'noe delenie na 01 01 1999 goda, Yakutsk: Pravitel'stvo Respublika Sakha (Yakutiia), 1999, p.82)。これらは，ロシア革命以前に当該地域で用いられていた行政単位であり，かつサハ人の伝統的な政治・社会的組織でもある。これに見られるように共和国内部では村の名称も含めて様々

な行政単位が，ロシア＝ソビエト的なものから，伝統的なサハ的なものへと変更されている。

（＊4）北方圏フォーラムについては以下の二つのURLを参照。
http://www.northernforum.org/
http://www.pref.hokkaido.jp/soumu/sm-tksai/nforum/index_hongenkou.files/ipage.htm

（＊5）これはソビエト民族学における生業分類の考え方で，日本語では佐々木史郎の論文（「アムール川下流域とサハリンにおける文化類型と文化領域」『国立民族学博物館研究報告』16-2，1991年）を参照。

（＊6）これらはユカギールのグループ名のカタカナ表記については，V.トゥゴルコフによるユカギール民族誌（『オーロラの民――ユカギール民族誌』斉藤晨二訳，刀水書房，1995年［原書は1979年］）を参照した。

（＊7）1900年を境として，それ以前にシベリアへ植民したロシア人は先住ロシア人（starozhily）と呼ばれ，それ以降については新規移民（novosely）といい分けられる。

（＊8）ここでいうヤクーチアの先住民とは前述したユカギール人，チュクチ人，エヴェンキ人，エヴェン人，サハ人，ドルガン人である。論者によってはヤクーチア先住民(korennnoj naselenie/ korennye narody)のなかで他と比べて際だって人口が多く，ソ連時代自治共和国を形成したサハ人を特別視し，「先住民」範疇に含めない場合もある。これはソ連の北方先住民政策史とも関係するが，本稿では一貫して広い意味でヤクーチア先住民を使っている。ただし，後述する［シベリア少数民族］といった概念においては，サハ人は含まれていない。これはソ連時代及び現在のロシア連邦において人口の少ないシベリア諸民族が［少数民族］［先住民族］として特別な法的範疇におかれていることの反映である。なお，1999年採択されたロシアの先住民法についての意義と法律の日本語訳については，吉田睦氏の論考及び翻訳（「ロシア連邦先住少数民族基本法の採択と先住少数民族をめぐる法的状況」斉藤晨二編『シベリアへのまなざしⅡ――シベリア狩猟・牧畜民の生き残り戦略の研究』名古屋市立大学，2000年）を参照。

（＊9）ソ連の国勢調査における民族帰属は自己申告によって行われ，それを下に当局が公式民族リストを作成するが，1989年においてはその数は128だった。したがって自己申告された民族帰属の中には公式リストには含まれないものも出現する。国勢調査ではこれを「その他の民族」として取り扱っており，本文中にある12の民族とはこの中に含まれる。この公式民族リストを作成すること自体，ソ連・ロシアの民族政策においてしばしば問題を引き起こした。例えば1989年の国勢調査では自らをタタール人と考える人はタタール人として登録したが，公式リストにはタタール人とクリミア・タタール人が別々に集計された。さらに2002年10月に予定されている国勢調査ではタタール人のカテゴリーはタタール人，クリミア・タタール人，カザン・タタール，シベリア・タタールなどと合計７つの集団に分けられている。そのためロシア連邦タタールスタン共和国では，次回の国勢調査の中止を希望しており，そのこともあり現在公式民族リストは存在していない（著者からの私信）。

（＊10）ソ連崩壊後の1992年３月，ロシア連邦がその内部にかかえる共和国や地方・州などとの関係及び権限を定めた条約。法的論理からすると，本文にあるように，連邦を構成する共和国は，この条約によってロシア連邦に「加入」したことになる。

（＊11）この国章・国旗の政治的意味についての分析は拙稿(「自立と民族宗教の希求――サハ共和国における民族主義と文化復興」林忠行ほか編『スラブ・ユーラシア世界における国家とエスニシティ』国立民族学博物館地域研究企画交流センター，2002)参照。

（＊12）上院である共和国院の代議員は35の領域行政単位から一人づつ選出されるが，立候補できるのは共和国権力機関に関わる人々（例えば，領域行政単位の代表である市長・郡長やそれぞれの副代表あるいは巨大企業の代表）である。彼らはいわゆる任命制ではなく，選挙によって選出される。ちなみに2001年サハ共和国大統領として選出されたV.シュティロフ氏は，ダイヤモンド会社ALROSAの社長であり，同時に共和国院代議員であったが，大統領に就任する際に，代議員は辞職した。これに対し下院の代表院は人口に比例して設けられた選挙区から選ばれる普通選挙である。例えば北部地方の郡は人口が少ないため一つの選挙区となり，ヤクーツク都市特別管轄区では５つの選挙区が設けられる。そして下院の議員は上院とは異なり，５年任期として給与を受ける専門職である。また下院は年に２回招集される（著者からの私信及び著者の別論文V.Ignat'eva, 2000 Transformatsiia politicheskoi elity Yakutii: Novaia real'nost'// Put' k suvernitetu, Yakutsk.を参照）。